国際日本文化研究センター共同研究
「投企する古典性―視覚／大衆／現代」

研究代表者　荒木　浩

平成２９年度・第４回共同研究会（特別会議）のお知らせ

すっかり秋めいて参りましたが、いかがお過ごしでしょうか。かねてからのご案内どおり、本年度第４回共同研究会を開催いたしますので、よろしくご参集ください。

今回は、客員准教授の伊藤慎吾氏のプロデュースで、「お伽草子の再発見」という特別会議を開催します。詳細は、本案内後半のプログラムと要旨をご覧ください。研究会メンバーとともに、５人のゲストスピーカーをお招きし、多様な視点から、お伽草子の分析を行います。日文研の大衆文化プロジェクト（ホームページが出来ました。http://taishu-bunka2.rspace.nichibun.ac.jp/）の一環でもあります。

あわせて今後の研究会のことについても、議論し、情報交換いたしたく存じますので、万障繰り合わせの上、よろしくご参集ください。

※なお、今回の懇親会は、大衆文化プロジェクトの近世班（小松和彦代表）との合同で行います。にぎやかなパーティになると思いますので、こちらもぜひご参加ください。

記

日時：平成２９年１１月１８日（土）、１９日（日）
場所：日文研・第１共同研究室
タイムテーブル
１８日
１３：００～事務連絡・打ち合わせ
１３：２０～１７：３０―特別会議・お伽草子の再発見
１７：３０～１８：００―全体討議（総合討議・研究会打ち合わせ（１））
終了後日文研内レストラン「赤おに」にて合同懇親会

１９日
９：２０～１２：３０―特別会議・お伽草子の再発見
１２：３０～１３：００―全体討議（総合討議・研究会打ち合わせ（２））

お伽草子の再発見

中世後期にお伽草子と称される多種多様な短編の物語作品が次々に生まれていった。それらの中には、改作というかたちで近世に至ってなお成長を続けるものもあれば、作風を踏襲して新たに創作されるものもあった。しかし新たな物語ジャンルが生まれる中で、次第にその価値を失っていった。

お伽草子が再び注目されるようになるのは近代に至ってからである。〈国文学〉の研究が進むことで、文学史の対象にされていったのである。その評価は物語文学の零落した姿といった低い認識傾向が大勢を占める。しかし、それは一方で、民衆主体の文芸の萌芽として評価する流れも生み出していく。

近代におけるお伽草子は、そのような文学資料としての価値が見出されただけではない。絵巻・絵本としての美術的価値、児童文学を主とする子供の文化の中での価値、地域社会における歴史・観光的価値、近代文芸の題材としての価値なども発見されていったといえよう。そして、現代においてなお、これら諸分野での受容は続いている。

今回の企画では、〈古典文学が近代文化の中でどのような価値を与えられてきたのか〉という歴史的側面を踏まえ、〈現代の文化の中で、どのように受容されているのか〉という資源的な側面を見据え、大衆文化における古典文学の役割や意義を考える機会にしたい。

（伊藤慎吾記）

プログラム

18日

１３：２０～１８：００

13:20-13:30　導入：全体の概要、学問対象としてのお伽草子の受容史
伊藤慎吾（日文研・客員准教授）

〈１〉美術品としての評価

13:30-14:30　1　お伽草子絵巻と絵師　上野友愛（サントリー美術館・学芸員）

14:30-15:30　2　〈奈良絵本〉の定着と近代文化　恋田知子（国文学研究資料館・助教）

15:30-16:30　3　丹緑本の「発見」と「再創造」　宮腰直人（山形大学・准教授）

16:30-17:30　4　海外需要　徳田和夫（学習院女子大学・教授）

17:30-18:00　5　全体討議

19日

９：２０～１３：００

9:20-9:30　導入：メディアの中のお伽草子　伊藤慎吾

〈２〉近代文化における位相

9:30-10:30　1　お伽草子と子どもの文化
久保華誉（元国立国会図書館国際子ども図書館非常勤調査員）
10:30-11:30　2　近代文学とお伽草子～坪内逍遙『鉢かつぎ姫』を例に～
山本淳（立命館大学・非常勤講師）
11:30-12:30　3　中世を描くには　近藤ようこ（漫画家）
12:30-13:00　4　全体討議

要旨

18日

お伽草子絵巻と絵師　上野友愛

まず上層階級に愛好されてきたお伽草子絵巻は、やがて市民層にも浸透し、宮廷絵師だけでなく市井の絵師に至る広範な画人の手で制作された。質的に変化した絵巻に見出せるのは、稚拙美や素朴美だけであろうか。お伽草子絵巻の、庶民と美術を結びつけたメディアとしての功績や、その伝播に一翼を担った町絵師の隆盛など、美術史における多角的評価の可能性を考えたい。

〈奈良絵本〉の定着と近代文化　恋田知子

奈良絵本をめぐっては、京都の工房や絵双紙屋など具体的な制作の場や書写者の解明について研究が進展しており、その用語自体、指し示す内容から必ずしも適切でないことが指摘されて久しい。本報告では、近代文化のなかで、〈奈良絵本〉という用語がいかにして定着し、どのような評価がなされてきたのか、受容の様相を見渡し、その役割や意義について言及してみたい。

丹緑本の「発見」と「再創造」　宮腰直人

絵入版本としてのお伽草子を考える際に重要な対象に、丹緑本がある。絵入版本の挿絵に彩色をほどこすという丹緑本の技法は、寛永期のお伽草子の版本に散見し、その文化史的意義が注目されている。本発表では、近代社会におけるお伽草子の美術品の側面やその受容を幅広く考える手がかりとして、横山重の版本研究の検討を端緒に、吉田小五郎、芹沢銈介らによる丹緑本評価と再創造の様相を追跡し、「お伽草子再発見」の糸口としたい。

絵本・絵巻・異類物　徳田和夫

問題提起として成立するかどうか、欧米になぜお伽草子絵巻が、またその異類物が多く存しているのか。前々からもやもやと考えていたことを、ことのついでに見通しをつけておきたい。

19日

お伽草子と子どもの文化　　久保華誉

お伽草子の物語を、明治期から現代にかけて子どもの読みものという視点で追う。特に現代でも絵本になっている「鉢かづき」と、この夏、サントリー美術館の子ども向け企画「おもしろびじゅつワンダーランド」展でも展示された「鼠草子」を扱う。

近代文学とお伽草子～坪内逍遙『鉢かつぎ姫』を例に～　　山本淳

シェークスピアの翻訳でも知られる坪内逍遙（安政6～昭和10）には『新曲浦島』（明治37年刊）、『新曲赫映姫』（明治38年刊）、『役の行者』（大正6年刊）に代表される伝説に取材した演劇脚本がある。これらの作品群には『鉢かつぎ姫』（明治40年刊）というお伽草子「鉢かづき」に拠った作品があるが、先の三作品に比べ顧みられることが少ない。そこで今回はこの『鉢かつぎ姫』を取り上げ、坪内逍遙を通して明治時代のお伽草子受容の一端を考えてみたい。

中世を描くには　　近藤ようこ

古典文学を漫画化あるいはアレンジしたものは数多く描かれ、広く読まれているが、お伽草子や説経節のような中世末の文芸を扱ったものは私の知る限りほとんどない。漫画界の空白地帯と言えるが、その理由を実作者の立場から考えてみたい。

【備考】

※発表に際してハンドアウトのコピーや配付が必要な場合は、事前に研究協力課研究支援係 kyoudou@nichibun.ac.jp にご連絡ください。

※共同研究員の方・ゲストスピーカーの方は、当日印鑑をご持参ください（旅費の支給等書類作成のため）。

※土曜日・日曜日は、日文研の正門が閉まっています。北門からお入りください。

※宿泊は、日文研ハウスが利用できます。ご希望のかたは、お早めに、研究協力課研究支援係（075-335-2044）までお問い合わせください。

※日曜日はレストラン「赤おに」はお休みです。